

- 1 春愁やこゑを探してみづを汲む
- 2 リヤカーの豆腐屋が来る春が来る
- 3 恋猫のきのふとはまた違ふかほ
- 4 横丁をはづれて壺焼の匂ふ
- 5 色街の風たくはへて春コート
- 6 羽ばたけば色生まれけり鳥の恋
- 7 ふうらここや人間はみな空へ帰す
- 8 下向けば道はレンガの入試かな
- 9 いちまいの湖へ帰雁のこゑ満ちて
- 10 とつぷりと苗札の字の暮れにけり
- 11 たんぽぽのたつぷりとあり子が転ぶ
- 12 置かれては少しずらされ雛飾る
- 13 先生はチューリップ抱き離任せり
- 14 くびすぢに花びらのある花見かな
- 15 たちまちに船現るる海市かな
- 16 古本を重ねて匂ふ櫛の花
- 17 がりがりとなにかを喰らふ復活祭
- 18 街へ出てそのにぎはひや遅桜
- 19 ちりぎはをゆるくまはりぬ春の風
- 20 生徒なほ先生が好きヒヤシンス
- 21 酢醬油にやさしき甘さ花疲れ
- 22 裸婦像は鴉をあつめ修司の忌
- 23 行く春や帽子にそれぞれのかたち
- 24 桜鯛海は持たざる色を持ち
- 25 ゆふぞらをランプのごとく石鹼玉

- 26 生きるにはふるさとを欲り夏蜜柑
- 27 時鳥まぶしき雨を葉は抱へ
- 28 島風を銀色と言ひ花蜜柑
- 29 なかぞらを鳥の制する麦の秋
- 30 かざす手の昏く端午の陽を統べる
- 31 夕涼やみづにはみづの流れ方
- 32 女滝より風したたかに生まれけり
- 33 鳥声を薄暑の川へ展げけり
- 34 薫風や車掌の腕のよく伸びて
- 35 橋は木の匂ひを放ち梅雨晴間
- 36 あをぞらのあを借りてゐる花樗
- 37 草笛や世界に海の名のそれぞれ
- 38 輪郭のぼやけてきたる氷菓かな
- 39 小説のもうすぐ終はるハンモック
- 40 蛾の焼ける音をしるべに夜の公園
- 41 死してなほ綺麗なかたち熱帯魚
- 42 溺れるにほどよき狭さ水中花
- 43 日盛の硝子は色をもてあます
- 44 朝焼やノイズのごとく岩に波
- 45 あをぞらをくづして長し捕虫網
- 46 先生はどンドン進み道灼けて
- 47 鳴くに喉使はぬことも油蟬
- 48 メロン食ふたちまち湖を作りつつ
- 49 空蟬をはがせる指の瘦せてをり
- 50 美しき高さありけり合歡の花

- 51 砂浜はひかりを余し秋初め――
- 52 秋暑し額に眼鏡の忘れられ――
- 53 鳩吹の暗がりへ風吹き込んで――
- 54 あきらかに白磁の色を蕎麦の花――
- 55 しづかなる町を知りたし草雲雀――
- 56 朝顔や雨の匂ひの窓に触れ――
- 57 濡れてなほ純白であり棉の桃――
- 58 蟻螂のまつすぐ立てる花のうへ――
- 59 刃毀れや失ひやすき梨のみづ――
- 60 秋の蚊の雨後はとりわけ血に飢ゑて――
- 61 沢音の常にしたしく杜鵑草――
- 62 素十忌や手水は竹の匂ひして――
- 63 県道はだらしなく伸び曼珠沙華――
- 64 実柘榴や触ればくづれさうな家――
- 65 川風をまつたり使ふ秋の蝶――
- 66 眠くなる素秋の川を聴けばなほ――
- 67 塔はたをやかに色鳥を飼ふ――
- 68 瀬音より鳥声大き秋の暮――
- 69 火の終はりかけて流星通りけり――
- 70 散り初めて雨後の木犀よく匂ふ――
- 71 梅擬こんなところに家が建つ――
- 72 月白や家は屋根より衰へて――
- 73 さやけくて母を起こしにゆくところ――
- 74 虫籠を湖の暗さの物置より――
- 75 おほかたの橋錆びてゐる紅葉狩――

- 76 あをぞらは花鳥を育て神の留守―
- 77 鎖が匂ふ十一月の公園は―
- 78 石路の花一步に寺の軋みけり―
- 79 花枇杷や雨後の墓石の澄みきりぬ―
- 80 自転車に胴体のある夕焚火―
- 81 綿虫や町暮れてより塔暮るる―
- 82 ひとこゑに夜の満ちてくる酉の市―
- 83 はつ雪や眼鏡はづせば好きな人―
- 84 凍星やチェロより音の滴りぬ―
- 85 冬川に透明といふ昏さかな―
- 86 凍鶴のこゑを旅の荷ととのはず―
- 87 夜となればまぶしき駅やポインセチア―
- 88 奪ひ合ふためのストーブ点けにけり―
- 89 読み終へて本に厚さや十二月―
- 90 しろがねの埃を払ふ漱石忌―
- 91 風呂吹のくづれやすきを愛しけり―
- 92 蜜柑剥くやうやう帰心失へば―
- 93 鳩鳴けり波の消えゆく淋しさに―
- 94 土産屋に土産虚しき冬日向―
- 95 天井の迫つてきたる避寒宿―
- 96 街ぎらつく置きどころなき手が寒い
3
- 97 列車過ぐその終はりより悴みぬ 晩―
- 98 冬すすきいづれの川も海へ出て―
- 99 着膨れて橋は未来を語る場所―
- 100 風花を乗せ隆々とらくだの背―